

井上靖

憂愁平野

憂愁平野

井上靖

新潮社版

野平 愁憂

《井上靖小説全集22》



昭和48年11月20日発行

昭和57年3月30日4刷

定価 1300 円

© Yasushi Inoue, 1973,
Printed in Japan.

著者 井上 靖

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一 電
話・業務部(〇三)二六六一
五一、編集部(〇三)二六
六一五四一 郵便番号・一
六二 振替・東京四一八〇八

印刷所 二光印刷株式会社
製本所 株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、御面倒で
すが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担に
てお取替えます。

目次

憂愁平野

五

自作解題

四〇一

装
画
加
山
又
造

井上靖小説全集

第22卷

憂愁平野

一章

亜紀は夫の賢行の書齋にはいつて、扉口のところで立ち停まった。部屋の右手の方に事務机の大きいのが置いてあり、その向うは窓になっていて、硝子戸を通して庭の一部を覗くことができる。庭の一部と言っても、亜紀の眼にはその時花壇の葉鶏頭の燃えるような赤さだけが映っていた。亜紀は自分が部屋へ足を一步踏み入れた時、その葉鶏頭の赤さに射すくめられたようにそこに立ち停まったのか、立ち停まってから葉鶏頭の方へ眼を遣ったのか、その点ははっきりと判らなかった。が、いずれにしても、ひどくしんとした一瞬であった。森羅万象尽くがじっと息を詰めてしまったような妙に静かな瞬間であった。亜紀は呆然とした面持ちで、その異様としか形容できぬ静けさの中に立ちつ

くしていた。

少くともその時、亜紀は自分が何のために、何をしようと思つて、夫の部屋へやつて来たのか判らなかった。部屋にはいつて来たからには、何か目的を持ってやつて来たのに違ひなかったが、それを不意に忘れてしまった氣持だった。

葉鶏頭の赤さだけを、亜紀は見詰めていた。どうして葉鶏頭はあんなに赤いのであろうか。まるで火の固まりではないか。赤い、赤い。赤い、焰のように燃えている赤さなのだ。

その時、亜紀の立ちすくんでいる静けさを破るように、二部屋おいて向うにある台所の方から何か瀬戸ものでも割れるような、金属性の、それでいて乾いた高い音が聞えて来た。粗忽者で通っている女中の朋子がまた何か器物をこわしたのに違ひなかった。しかし、その音が女中の朋子に依つてひき起されたものであろうという判断を下すには少の時間が要った。音が聞えた瞬間、亜紀はその音が当然起るべくして起つたような氣がした。葉鶏頭がこんなに赤く、こんな静かな空間で燃えているのだから、必然的に何かは起らなければならなかったのである。そして当然起るべきものとして、乾いた破壊音は起つたのであった。続いて小さい事変はもう一つ起つた。亜紀はどういうも

のか事務機の横手の壁面にかけてあるレマン湖畔の風景を描いたイタリヤの画家の油絵がその時少し傾くのを見たように思った。よく見ると、実際にその時傾いたのか、既に傾いていて、その時初めてそれが傾いていることに気付いたのか、その間の事情は亜紀には判らなかった。

亜紀はそれから暫くの間、そこに立ちすくんでいた。そして次第に自分の心を理由のない不安が充たして来るのを感じていた。満潮時に、潮が川口に^遡つて来、次第に川の水位を高めて行くが、丁度それに似た充たし方で、亜紀の心を故知らぬ不安が充たして来たのであった。不安は夫の賢行と結び付いていた。亜紀は賢行が今この瞬間、自分の知らぬ生活を持っているのではないかという、そんな気持ちに襲われていた。彼女は賢行に対してこのような疑惑を今までに一度も持ったことはなかった。この時が初めてであった。どうして不意に夫への疑惑が頭を擡げて来たか判らなかつたが、しかし、ともかく、このような時にこのようにして、そうした夫への不信の念は初めて亜紀の心にやって来たのであった。

どうして、このようなことにもっと早く気付かなかつたのであらう。賢行は自分に^隠れて何をしているか判ったものではないのだ。いや自分だけではない。世間全部に隠れて、たれもが知らない自分だけの生活を持っているかも知

れないのである。亜紀は夫の机のところへ行くと、机の上に立てられてある小さい鏡を覗いた。そこにはひどく真剣なものが走っている女の顔があつた。いつもの自分の顔ではなかつた。口が耳まで裂けかかっているかのように見え

た。
亜紀は昨日から賢行が行っている軽井沢のホテルに行ってみようかと思つた。自分の知らない女と一緒に居るかも知れないのである。それは充分にありそうなことなのだ。虫一匹殺さないような顔をしていて、ゴルフだとか何だとか言つて、何をしているか判つたものではないのだ。

亜紀は夫の書斎から出ると、すぐ台所を覗いてみた。果して、朋子が床に散らばっている花瓶の欠片^{かけら}を掃き集めていた。

「また壊したの、厭ねえ」

亜紀は眉をひそめて言つた。どちらかと言えば嫌いな花瓶であるから、壊して貰つて有難いようなものであつたが、この場合の気持は少し違つていた。それが賢行の不貞に關係のあることでもあるかのように、きゅうと亜紀は自分でもそれと判る棘のある眼を若い女中に当てた。

「いま二時ね」

「そうでございます」

「わたし、急に用事ができたので旦那さまの行つてらっし

やる軽井沢へ行って来ます。明日午後には帰って来るけど、お留守番に弘之さんにでも来て貰いましょう」

亜紀は言った。弘之というのは、時々こうした用事の時頼む私大へ通っている親戚の青年である。

亜紀は結局四時に家を出た。自分でくるまを運転して軽井沢へ行くのは三度目である。軽井沢まで道はずっといいが、高崎付近までトラックの多いのには閉口する。それに天候が少しはつきりしないので、もしかすると碓氷峠に霧がかかるかも知れない。碓氷峠で霧に出られると、少し厄介である。山側に沿ってのろのろ上って行かなければならない。

亜紀は東京を出て大宮あたりまでは、トラックにはさまれたまま走った。しかし、大宮を出るあたりからくるまは急に少くなり、それから前後に気持を使うことなくハンドルを握ることができた。賢行は臆病というか、用心深いというか、余程の時でない限り、亜紀の運転するくるまには乗らない。高い金を出して折角買ったくるまなのだからもっと利用したらいいわけだが、何だかんだと言って、亜紀の運転するくるまには乗りたがらない。

亜紀は、そうした賢行に勿論不満を感じないわけではなかったが、他のこととは違って、まかり間違えば人命に関

係するくるまのことだから、無理に自分の言い分を押しつけるわけにも行かなかった。こんどの軽井沢行きにも、賢行はゴルフ仲間の何人かとワリ勘でタクシーを使っていた。亜紀はゴルフもできないし、軽井沢というところも余り好きではなかったので、軽井沢などに一緒に連れて行って貰いたいとは少しも思っていなかったが、それにしてもくるまで送ってくれと頼まれれば、そのためのくるまでである以上、運転の労は惜しまなかった筈である。

熊谷の街を過ぎるあたりから道の左右に平原が拡がり始め、そこに初秋の夕闇がうつすらと流れ始めた。薄紫色の夕闇である。亜紀は初め田圃で何か焼いている煙が薄い紗のように四方に拡がって行くのかと思っていたが、その煙はどこまで行っても、平原の上に漂っていた。注意してみると、それは煙ではなかった。確かに刻一刻濃くなりつつある夕闇の層と見るほかはなかった。亜紀は夕闇というもの薄い紫色を呈していることを初めて知ったのであった。

亜紀はそうした夕闇の平原の中を、かなりの速度でくるまを走らせていた。そして、賢行が自分の運転するくるまに乗りたがらないのは、そのために彼は彼自身の自由を束縛されることを恐れていたのではないかと思った。きっとそうに違いないと思った。賢行はやはり彼だけの、亜紀の

知らない生活を持っているに違いないのである。

亜紀は賢行の不貞を発見した時、自分が賢行に投げつける最初の言葉を、碓氷峠を越えるまでに用意しなければならぬと思った。わたし、前から知っておりまして。ずい分前から、ちゃんと感付いておりました。——いや、こんな言い方では駄目である。あなた、ずい分ひどいことをして下さいましたわね。長い長い間、わたしを騙して。——いや、こんな陳腐な言い方でも駄目である。賢行の息の根をとめることはできない。相手は顔色一つ変えないだろう。自分のような立場の女は短刀のように鋭い言葉を使わねばならない。短い鋭い言葉でいっきに相手の心臓を突きさし、その鼓動をとめてしまわなければならないのだ。

亜紀は、高崎で、くるまを停め、いつもお茶を飲むバス会社の休憩所へはいって行った。軽井沢までの三分の二を走ったわけで、亜紀はさすがに疲れを覚えていた。休憩所の椅子に倚って、街路に眼を遣ると、戸外はすっかり夜になっている。しかし、亜紀の疲れは運転のためばかりではなかった。東京から高崎まで、賢行と格闘し続け、烈しい言葉を相手に投げつけて来たからであった。

亜紀はミルクのはいらぬ珈琲を飲みながら、ああ、苦しいと思った。そしてこのような苦しみを自分に与える賢行を決して自分はもう許さないだろうと思った。十分程の休

憩が三十分近くなった。その間に亜紀のあとから来たくるまは何台か出発して行った。

七時半に、亜紀はその休憩所を出た。高崎からはまた目立ってくるまは少なくなった。軽井沢の方からやって来るくるまはそれでも絶えることなくあったが、軽井沢の方へ向うくるまで、めったに亜紀のくるまを追い越して行くものはない。

スピードを出すと、亜紀の眼には真直ぐに延びている舗装道路が一本の長いベルトに見えた。くるまはそのベルトに物凄い勢で巻かれて行くとも、反対にくるまがそのベルトを巻きつけて行くとも感じられた。ベルトはどこまで行っても尽きなかった。くるまはその尽きることのないベルトの上をベルトに巻かれながら走って行く。あるいは己が体の中にそのベルトを巻きつけながら走って行く。亜紀は漸く快いスピードの中に自分を落し込むことができた。しかし、そうした中に於ても、時々賢行の顔が閃いた。

道はやがて上りになった。上りになるとすぐ道はやたらに折れ曲り始めた。三、四十分の間、亜紀は前方から現われるヘッドライトばかりに注意しながら、折れ曲る道と闘った。うんざりする程同じような屈曲が続いた。そして漸くのこととて、亜紀はくるまと一緒に碓氷峠のてっぺんに降り出された。いやに平坦で薄ら寒い高原の台地が、そこに

は拡がっていた。

峠を越えた時、亜紀は前に一度泊ったことのある日本旅館へ自分は今夜泊ろうと思った。いきなり夫の泊っているWホテルへくるまを乗りつけることが、やはり何となくはしたなく思われた。賢行の寝込みを襲うのは何もこの夜更けでなくても、明日の朝で充分目的は達せられる筈であった。

亜紀がこうした考えを持ったのは、やはり東京から軽井沢まで四時間余りドライブして来た疲れのためであったかも知れない。亜紀は夫との悶着を明日の朝まで延期し、今夜は何はともあれ、自分一人で手足を伸ばして寝みたかった。軽井沢の高原へ辿り着いた亜紀はいつかそんな気持ちになっていた。

翌朝、亜紀はスーツケースに詰め込んで来た和服を着て、早い朝食をすますと、すぐWホテルに夫を訪ねるために、から松に取り巻かれた日本旅館を出た。そこからWホテルまでは歩いても三十分とはかからないということだったので、くるまは使わなかった。

朝霧がかなり深く立ち込めている。道を歩いて行くと、次々に前方の霧の中から松や糸杉の林が姿を現わして来る。東京では考えられぬ寒さだったが、さすがに初秋の

高原の朝の気分はよかった。

亜紀はWホテルのフロントへ行くと、賢行の部屋を訊いた。そして思いきって、

「一人でしょうか」

と口に出して言ってみた。

「みなさん、おひとりの部屋をおとりになっています」

若い事務員は言った。みなさんというのはゴルフ仲間のことらしかった。

「まだ寝んでおりますのね」

「今日は午前中はブレイがない筈ですから、ゆっくりお寝みだと思えます」

亜紀は多少張合抜けした気持で、事務員のあとから別館へ通じている廊下を渡って行った。

亜紀を部屋の前まで案内すると、事務員はすぐ帰って行った。亜紀はノックする前に扉の把手を廻してみた。鍵はかかっていず、扉はすぐ開いた。部屋は二人部屋で、入口の部屋には机と椅子とソファが配されてあった。その部屋の向うが寝室になっている。

寝室にはいつてみると、ダブルベッドの上に、賢行は両手を左右に拡げ、大の字になって倒れていた。まるで討死でもしているようなそんな正体のない寝相であった。ベッドの横の椅子の上には、ゴルフ用のズボンが二つにたたま

れて置かれてあり、その横に赤い線のはいつた派手な靴下が、これもきちんと揃えて並べられてある。

亜紀は賢行の寝顔を覗いてから、枕の横にゴルフの本が一冊、まん中どこを開けられたまま伏せられてあるのを見た。ゆうべ床にはいつてから読んでいた本に違いなく、眠くなると、片付ける余裕もなく眠りに落込んでしまったものであろう。

亜紀はベッドの頭の方へ廻って、賢行の大きな図体を暫く眺め降ろしていたが、やがて右の掌をびたりと夫の額の上に置いた。当然賢行は眼を覚ますと思つたが、相手はびくりとも体を動かさず、蠅でも追い払うように、眠つたまゝ右手で亜紀の手を払った。

亜紀はもう一度掌を賢行の額の上に置いてから、
「あなた！」

と言つた。すると、相変らず眼をつむつたまま、
「なんだ？」

と、賢行は意想外にはっきりした声で言つた。

「お起きになつたら？」

「何時だ」

「もう八時半でしょう」

「八時半!？」

それと一緒に賢行は毛布の中に体をずり込ませ、顔を毛

布で覆うようにした。

「お起きなさいませよ」

「寝せてくれ、たまには」

「でも」

「うるさいな」

その賢行の声はひどく邪慳に亜紀には聞えた。大体、東京に居る筈の自分の妻が軽井沢のホテルに現われているのに、賢行はそのことを何とも思わぬのであろうか。うるさいとは、ずい分人を食つた挨拶だと思つた。いつ来たかぐらひは当然訊ねてくれてもいい筈である。

「たばこをくれ」

それと一緒に賢行は大きな欠伸をして、

「八時半だつて!？」 また朝っぱら早くからやって来たものだな」

と言つた。

「わたしの来たことだけは判つてますのね」

それには構わず、また、

「たばこをくれ。火をつけてくれ」

そう賢行は言つた。

「折角東京から来たんだ。火をつけてくれよ」

「たばこの火をつけるために東京から来たんじゃないわ」

亜紀は言つた。

「じゃ、なんのために来た？」

「まあ、ひどい」

聞き棄てならぬと思った時、相手はむっくりと起き上った。ゴルフのお蔭で瘦せた瘦せたと言っているが、それでも二十貫近くはあるだろう。その大きな図体を特別仕立ての浴衣に包んで、ベッドの上に大胡坐おおこゝろをかいている。賢行が胡坐をかくと、亜紀はいつも昔の博奕ばくち打ちの親分を思い出す。どこかに不逞なものが顔を出している感じである。大体亜紀は結婚する時、肥った人と、顔の生白い人は避けていたのであるが、どういふものか肥った男性が当ってしまったのである。そのことを思うと、おくれはせながら、亜紀は賢行に文句をつけてやりたい気持ちになって来る。しかし、慣れというものは恐ろしいものだと思ふところがある。最近は大兵肥満の人物がさほど厭でもなくなり、それどころか反対に瘦せている人物の胸の薄さが、妙に頼りなく、もう少し空気で人も入れてふくらませられぬものかと思ふようになっていく。

その、結婚前は厭で、最近はそれほどなくなっている肥った体が浴衣をずり落して全裸になると、腕を左右に伸ばして体操を始めた。体だけ見ていると、薬品の広告に使われているモデルのように逞しく見える。

亜紀はビースの罐を取って夫の方へ差し出した。火など

つけてやるものかといった気持ちだった。すると、賢行は罐の方は見向きもしないで、こんどは、

「水をくれ」

と言った。

「水ですか」

「水だ」

「何を威張ってらっしゃるの。寝起きが悪いいたらありはしないわ。虫でもいるんじゃないや。一度お医者さんに診て貰うといいわ」

亜紀は言った。

「なに！」

賢行は喧鳴るように言った。

「虫とは何だ？」

「——」

「いかなる虫だ」

蜘蛛かいこ虫だと口から出かかったが、亜紀は危くそれを飲み込んだ。ここまで言うとは、相手を烈火の如く怒らせてしまうことになる。虫という言葉が出た序に、亜紀は他の虫のことを思い出した。

「悪い虫」

そう亜紀は言った。

「悪い虫とは？」

相手の語勢は急に衰えた。それがはっきりと判った。

「何だか知りません。悪い虫がついたのかも知れないと思ひましたの」

「悪い虫か、なるほどね」

賢行はベッドを軋こませながら床へ降り立つと、水のことはずっかり忘れてしまった風を装って、ベッドの上に置かれてあるピースの罎かまどから一本引き抜いて、

「晴れてるかい？」

と、そんなことを訊いた。急に鋭さがとれてしまつて、いやに田舎な感じだった。亜紀はこうした夫の変り方が氣に喰くわなかつた。脛すねに傷もつ身の弱さのような氣がした。

尤も賢行の寝起きの悪さは、毎朝のように寢床から離れるまでの極く短い時間のことで、寢床から離れてしまえばけろりとしてしまふ程度だから、いまの場合も、必ずしもそこに意味があると臆測しなければならぬわけのものでもなかつたが、しかし、今の亜紀はそれをいつもと少し違つたものに受け取っていた。

賢行が洗面し終るまで、亜紀は多少神經質な眼を部屋の内部へと光らせていた。机の上に小さなカードが何枚か並び立ててある。取り上げてみると、ゴルフの成績を書き込んだもので、5だとか6だとかという数字がやたらに並んでいて、そのカードの上の方には御丁寧ごていねいにその行われた

日まが書きこまれてあつて、その中の一枚にはペンで優勝などと記されたりしている。忙しい、忙しいと言つて手紙一本書かないくせに、よくもまあ、こんな子供だましみたいなものを書きつけているものである。こんなものを見せられると、かりそめにも嫉妬あやうしたことが、亜紀には莫逆ばくらしくさえ思われて来た。

東京の家と同じように、部屋にはゴルフのタマがあちこちにごろごろしている。一体、よその家では、この汚れて使ひものにならなくなつた小さなまゐるい物体を、どこへ始末するのであろう。安全カミソリの刃の方はまだ土中に埋めれば錆さびびついてしまふが、ゴルフのタマときたらそうはいかない。カミソリの刃のように物騒でない代りに、いつまでも消えないで、ごろごろしているから始末に悪い。

「食事に行こう」

洗面所から出て来た賢行は言つた。

「わたし朝御飯はすませて来ました。お茶だけ戴かぶきます」
亜紀は言つた。

「いやに早いんだな。どこで食べた」

「旅館です。わたし、軽井沢にはゆうべ来ましたのよ」

「なんだ！ ゆうべのうちに来ていたのか」

それだけ言つて、たいしてそのことには関心はないらしく、

「ようし、今日はひとつ——」

そんなことを言いながら、腕を振り廻して部屋を出て行った。ゴルフのことらしかった。

食堂で賢行が朝食を摂っている間、亜紀は新聞を読みながら珈琲を飲んだ。食堂には他の客の姿は見えなかった。

「今日お帰りになりますか？」

「うん」

「何時頃」

「十時から仲間と廻って、そのあと一人で廻る。そうだな、六時から七時頃こちを発つから十二時近くなるんじゃないかな。——君は？」

「わたし、折角来たんだから、お連れの別荘に顔を出してやはり夕方こちを發ちます」

「じゃ、東京で同じ頃一緒にになる」

「そう」

亜紀は頷いてから、夫の言葉を補足するように、

「厭でも一緒になっちまう」

と言った。すると賢行はちらっと眼を光らせたが、すぐもとの顔になって、

「君、ブディング食べろよ。ここのはうまいんだ。君に一度食べさせようと思っていたんだ」

そんなことを言った。亜紀は思わず笑いかけたが、すぐ

顔を硬くした。そんなことでは笑うものかと思った。

亜紀は自分の泊った日本旅館へ帰ると、急に疲れを覚えて、縁側近くに座蒲団を出して、そこに少し横坐りに坐っていた。縁の向うには苔に覆われた庭があり、から松が疎らに生えている。もともとから松の疎林の中に建てた家でもとは誰かの別荘だったのが、終戦後人手に渡って旅館になつてしまつたと聞いている。

亜紀はから松の林に見入っていた。いずれも同じような太さの幹を持ち、いかにも育ちのいい感じで真直ぐに上に伸びている。亜紀はから松の林を見ながら、昨日からの自分が少しどうかしていることに気付いていた。しかし、それは突然自分にやってきた異常さではなく、いつ昨日のような精神状態に陥っても不思議はないように、それはもう何年も前から自分には用意されていたことかも知れないと思つた。

経済的には一応生活は確保されている。賢行は中級の商事会社の幹部である。もともと賢行の亡くなった父親が作った会社で、現在は父と親しかった人物がいれば会社を預っているような形で社長になっているが、行く行くは賢行が社長の席に坐ることは約束されているようなものである。賢行は会社の幹部中でも一番人気がある。総じて物にこ

だらぬ大まかな坊ちゃん坊ちゃんした性格だが、ゴルフに行くのには決して会社のくるまを使わないようないやに固苦しい一面もあって、そんなところが上からも下からも信頼されている形である。学歴もいわゆる秀才コースを真直ぐに、別に無駄足もしないで通っていて、亜紀自身結婚する時、図体が大きいということを別にすれば、どこを探しても欠点というものが見つからなかったくらいである。

そうした賢行との結婚生活で、七年ほど経ったいま、亜紀はよく自分の心を内側にまではいって索（さぐ）ってみるが、いつも何か充たされない空虚さを感じている。心の中に大きな容器があって、それにいっぱい何ものかを満たしたいが、それが少しも満たされていないことに、亜紀は最近になって気付き始めている。

自分という女はいい加減なところで満足して行けないようにできているのかと、亜紀は思う。それでは何が満たされていないのかと問いつめられると、亜紀とてすぐには返答に困るが、しかし、女としての自分が心と体の両方で必死に望んでいるものは与えられていないのである。

賢行から優しく愛撫されたり、愛の言葉を囁かれたりすると、その時だけ心の中の容器は何ものかで溢れるような気持になったが、しかし、それは一時だけのことで、潮が退くように、それに気が付いた時は、いつもその何ものか

は失くなっていった。

婦人雑誌などで生きるために必死に働いている人たちの手記を読んで、目下のところ生きて行くことに心配を持っていない女の贅沢なわが儘だと思ひ込もうとしても、しかし、それだけでは納得できぬものがあつた。亜紀には自分の周囲の女の人たちが、みな一緒に自分と同じ不満を持っている生きものに見えた。身を粉にして働いている人も、働いていない人も、女という名で呼ばれている生きものは、心の内を開いて見せ合えば、みな同じような空虚な心情ではないかと思つた。

そうしたことは子供がないからで、もし子供を持てば、子供を育てることに専念していたら、そんなくだらない不満は起る余地がないと言ふ人があるかも知れない。しかし、亜紀はそうしたことは無関係だと考える。子供を持てば子供を育てることにまかせて、あらゆる不満は感じられなくなるかも知れない。しかし、それはそれで問題が解決されたわけではないのである。不満が失くなったわけではなく、ただそれを感じなくなってしまっただけの話である。女でなくなつて、母になつてしまふだけのことではないのか。

亜紀は、自分も将来子供を持てば、恐らくそうなるだろうと思う。そうなれば、そうなつて一生を送つてしまつて